

パプア・ニューギニア高地、食を通して見るドム人の生活

千田俊太郎

ちだしゅんたらう / 京都大学

パプア・ニューギニアの高地人は新しもの好きである。

20世紀半ば、西洋世界からの探検家、宣教師、駐在さんとの接触以降、社会が変化する速度には眼を見張る。田舎で自給自足の生活を続けるシンブー州のドム人の食を通して、新しくも古い生活様式を紹介したい。

パプア・ニューギニア



ニューギニア高地

シンブー州

日常の食

ニューギニア島は世界で二番目に大きな島である。内陸部に住む人々の中には、一生海を見ることのない人も多い。してみると不思議なのは、シンブー州を含むニューギニア高地の多くで、現在の主食がアメリカ大陸原産の薩摩芋であることである。大航海時代にニューギニア沿岸部にもたらされたものが、相当早い時期に内陸部に入り込んだものらしい。1930年代に探検隊により「発見」されたニューギニア高地人は、それ以前に外部との交渉を全くもたなかったわけではないのである。ドム人は、薩摩芋のほか、キャッサバや煙草などのアメリカ原産の農作物について、古い独自の伝統だと熱っぽく語る。数百年を経たものであれば立派な伝統ではあるが、伝統的なのはむしろ進取の気性なのだと解釈することもできる。薩摩芋の導入以前からの作物も多い。バナナ、タロ芋、ヤム芋、砂糖黍その他のくさくさの野菜のほか、珍味もある。しかし、とにかく薩摩芋がないとちゃんとした食事にならない、といった声も聞かれる。

近年、ドム人を虜にしてしまったものに、米、袋の即席麺、魚の缶詰がある。たまに食す、茹でた即席麺や缶詰の魚のをせた米のご飯は日常に、小さな幸せをもたらす。調味料や調理方法の限られた世界に突然精製塩と精製油が入った状況では、人工調味料のうまみは脅威的にはたらく。

冠婚葬祭の食

ハレの行事にもケの行事にも豚は欠かせない。関係者が持ち寄って、できれば数頭、有力者の場合は数十頭の豚が屠られる。昔は、広範囲の



毛を焼いて削り、解体した豚を蒸し焼きにする。



もう少しで熟れるコバの実。

ニューギニア高地人が一斉に豚を屠る「豚殺し」の行事があった。この行事はお祭りのためのお祭りだったのだが、多くの人にとって重荷だったため、1980年代に高地で一斉にこの行事をやめたよしである。最近ほどの行事の規模も縮小傾向であり、豚の飼育もそれほどさかんではない。お金があれば、街に出て輸入の羊肉を買ってくるのが手軽である。



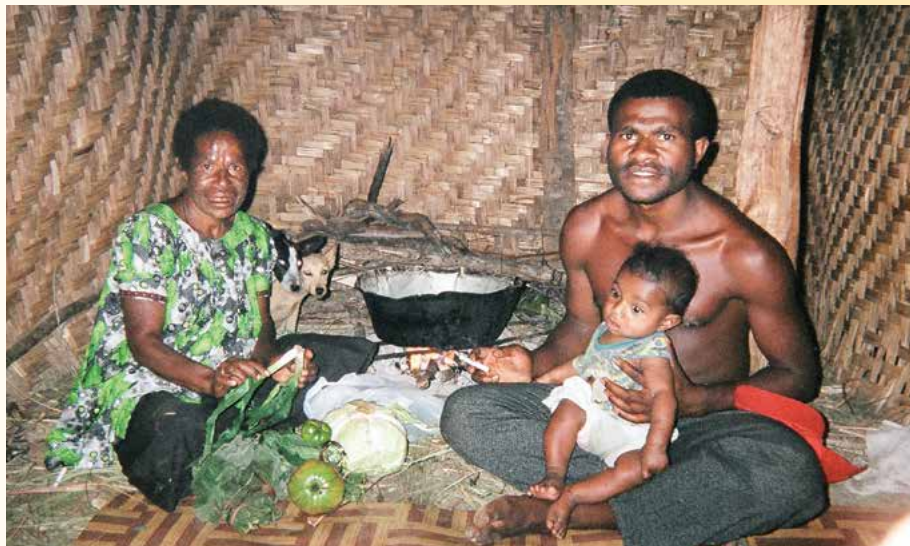
即席麺と野菜のをせたご飯を取り分ける。

*写真はすべて筆者撮影。

冠婚葬祭におけるクライマックスは、肉の山分け。



奥の二匹の犬（ホワイティとボス）はこのあと食べてしまった。



茹でたコパの実。



鉄砲虫を捕る。



おやつに蛙を捕ってきてもあぶる。

豚にせよ、羊肉にせよ、大きな肉塊を調理する際は、焼け石を使った蒸し焼きにする。豚なら先に解体しておく。普通は、地面に穴を掘って地炉とする。焼け石を敷き詰めたとこに食材を入れて、あとから若干水を垂らす。蒸し上がったら祭場に運ぶ。儀礼には演説がつきものである。有力者の演説が一通りすむと、いよいよ肉を取り分ける段である。主催者が、バナナの葉に肉を盛り、家族ごと、あるいは個人ごとに名を呼ぶ。多くは持ち帰って、家族で分けて食べる。日本なら結婚式の鯛といったところか。

伝統的な珍味

狩りや釣りは盛んではないが、有袋類や蛇、魚が時々とれる。犬、猫、時にはモルモットなど、ペットも美味しく見えたなら食べる。木に鉄砲虫が

巣食ったとなると、大人も子供も大喜びで捕りに行く。これらが日常にアクセントをつけてくれる。文明国からの闖入者は、近現代の栄養学を振りかざし、「けれども、これが彼らの貴重な蛋白源なのですね」と解説する。

ドム人は、彼らの住む環境を標高が高めの森の方と低めの河の方の二つの地域に分けて把握する。象徴的に、森の方にはアムルの木が育ち、河の方にはコパの木が育つ。どちらもタコノキ科の木で実を食用にするのだが、見た目も可食部も異なる。この二種の珍味は重要で、かつてはこれを両地域で交換する儀礼があった。コパの実は、赤く熟れたものをもいで、なかの白いワタを取り、茹でてこねる。種だけの真っ赤な油脂分のペーストができあがる。これをすくって、口の中で種を選び分けながら味をかみしめて、西瓜の種を吹き出す要領で種を出す。茹でた野菜になすりつけて食すのも一興である。

市場の食

ドムで「市場」と呼ぶのは、毎日人の集まるところである。必ずしも商業的な活動がその中心ではない。井戸端会議が始まればそれが市場だし、

野外でトランプやビンゴが始まれば、それこそ立派な市場である。そして、ものを売りたいと思ったらそこへ行くのが便利である。日用的ものは自給自足で足りる。市場では小銭でパイヤ、パイナップル、胡瓜、クラッカーを買ってつまんだり、あるいはお喋りをしたり、ゲームの見物をしたりする。血縁があり顔見知り同士の小さなコミュニティで金が回る。

夕方になり、日中トランプに打ち興じた配偶者が帰ってくると夫婦喧嘩が始まる。子供はバツタが食べたいと泣く。あんまり泣くので母親は「バツタを捕りに行くよ」と長いスコップを手にする。子供は慌てて母親のスカートの裾をつかんで立ち上がる。子供をあやす方便かと思ったら、本当に何匹も捕ってくる。もう少し大きな子供は蛙でも大蜥蜴でも一人で捕ってきて、家の炉であぶって食べる。年寄りが愚痴をこぼす。「昔はお金ってもんがなかったんだ。昔はバツタや蛙なんかしかなかつたんだ。お金が入ってきて、今の子はクラッカーや缶詰や即席麺を食べるんだ。」録音機を操作する私を指差す。「全部お前たちが持ってきたんだ。」そして、即席麺をのせた米の飯に舌鼓を打ち始める。

FP



薩摩芋は炉の灰の中で焼き芋にするのが伝統的で一番シンプルな晩御飯である。